

淡路地域ビジョン2050

人と自然の“環”が広がる淡路島
～「はじまりの島」からはじめらんか～



令和4年3月
淡路新地域ビジョン検討委員会
兵庫県淡路県民局

目 次

第1章 地域ビジョン策定の趣旨	1
1 地域ビジョン策定の経緯	1
2 地域ビジョンの概要	1
第2章 社会潮流	2
1 人口減少・超高齢化	2
2 自然の脅威	3
3 テクノロジーの進化	3
4 世界の成長と一体化	4
5 経済構造の変容	4
6 価値観・行動の変化	5
第3章 淡路地域の現状と課題	6
1 社会の現状と課題	6
2 経済の現状と課題	10
3 環境の現状と課題	12
第4章 淡路地域の魅力と可能性	15
第5章 淡路地域がめざすビジョン	18
第6章 淡路地域ビジョン2050の目標	19
第7章 ビジョンの実現に向けて	24
1 役割	24
2 ビジョン推進の仕組み	25
<資料編>	26
新地域ビジョンの検討経緯	27
数字で見る淡路地域	33

地域ビジョン策定の趣旨

1 地域ビジョン策定の経緯

淡路県民局では、平成13年2月に、これからの淡路地域のめざすべき姿や行動目標を示した「淡路地域ビジョン」を策定しました。策定して以来、今日まで、淡路地域を取り巻く様々な環境の変化に対応するべく改訂を行いながら、住民の参画と協働のもと、「環境立島あわじ」を理念に掲げ、ビジョンの実現に向けて様々な取組を実施してきました。

淡路地域ビジョンの策定から20年、改訂から10年が経過する中で、深刻な少子高齢・人口減少社会の進展、技術革新の急速な進歩など、私たちを取り巻く環境は日々変化し続けています。

また、世界中に猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症は、私たちの価値観や働き方、生活スタイルを大きく変化させました。

このような変化の時代において、淡路地域の将来のあるべき姿を地域住民とともに考え直し、理想の淡路島を実現するために新たな将来ビジョンを策定します。

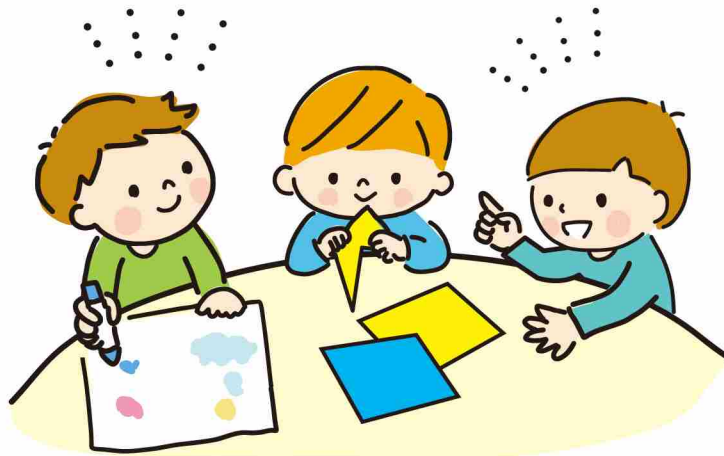
2 地域ビジョンの概要

(1) 地域ビジョンの役割

地域ビジョンは、地域のなりたい姿（理想の将来像）を描いており、住民・事業者・地域団体・行政など、多様な主体の参画と協働によって、その姿を実現するため、各主体が進むべき方向性を示す道しるべの役割を担っています。

(2) 展望年次

今の子どもたちが活躍する一世代後の2050年頃とします。

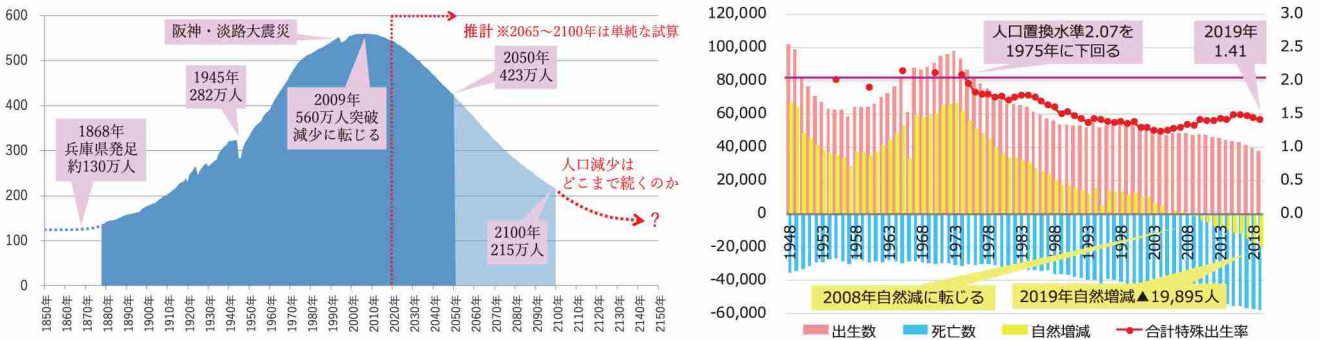


1 人口減少・超高齢化

(1) 総人口の減少

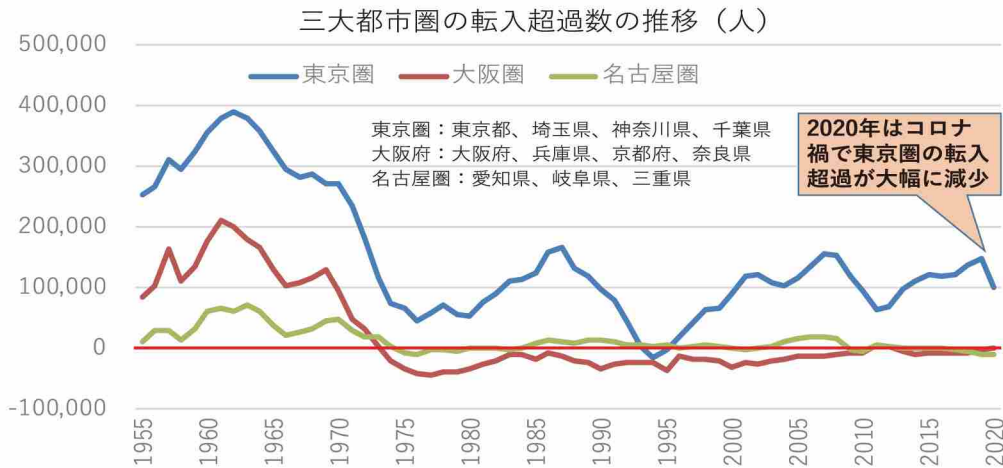
日本は本格的な人口減少時代に突入しました。2050年の兵庫県人口は2015年と比べて130万人減少し423万人になると推計されています。

兵庫県の合計特殊出生率は1.4前後で推移しており、今後も長期にわたって人口が減り続ける可能性が高くなっています。



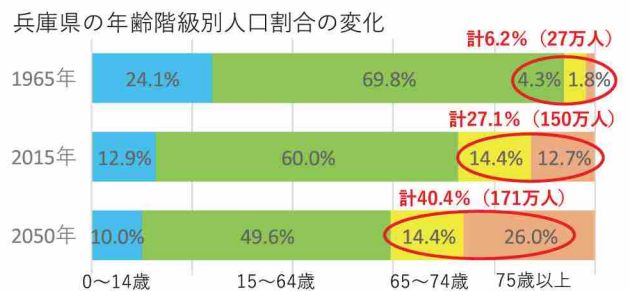
(2) 人口の偏在化

日本の総人口が減少する中で、都市部への人口集中と地方の過疎化が進んできました。一方で、コロナ禍を契機として東京一極集中から地方回帰への変化の兆しが見られるようになってきています。



(3) 超高齢化

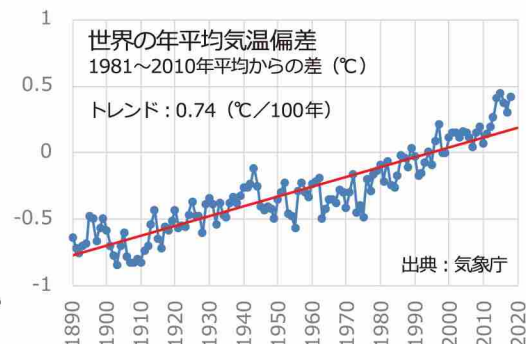
少子化と平均寿命の延伸により人口のますます多くを高齢者が占めるようになります。健康志向の高まりや医療技術の進展によりさらに寿命が延び、人生100年時代が到来すると予測されています。



2 自然の脅威

(1) 気候変動

地球規模で温暖化が進行しています。地球温暖化に伴う気候変動は、自然災害のリスクの増大や自然生態系の変化、人々の生活リスクの増加など、人類生存への最大のリスクとなる可能性があります。



(2) 災害の危機

被害が激甚化している台風や集中豪雨、新型インフルエンザや新型コロナウイルスなどの感染症、さらには、今後30年以内に高い確率で発生が予測されている南海トラフ地震など、私たちの暮らしは常に自然災害の脅威と隣り合わせにあります。

近年の災害	1995年	阪神・淡路大震災	2014年	8月豪雨
	2004年	台風第23号	2016年	熊本地震
	2009年	新型インフルエンザ	2018年	7月豪雨
	2009年	台風第9号	2018年	台風第21号
	2011年	東日本大震災	2020年	新型コロナウイルス

3 テクノロジーの進化

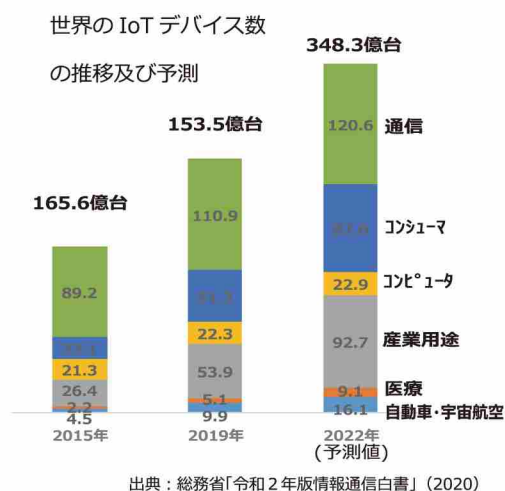
(1) 未来のテクノロジー

ICT^{※1}の目覚ましい進歩により、自動運転の普及やドローンでの移動、AI^{※2}やロボット技術の応用などにみられるように、未来のテクノロジーが社会や暮らしのあり方を大きく変化させています。

(2) データの最大活用

IoT^{※3}が幅広い分野に拡大し、あらゆるモノがネットにつながる社会になっています。

今後もデジタル技術は更なる進化を続け、現実空間と仮想空間が高度に融合したシステムが整備され、社会課題の解決や一人ひとりに適したサービスの提供が実現されます。



※1 ICT:「Information and Communication Technology」の略で通信技術を活用したコミュニケーションのこと。【活用例: オンライン授業、テレワーク、遠隔診療など】

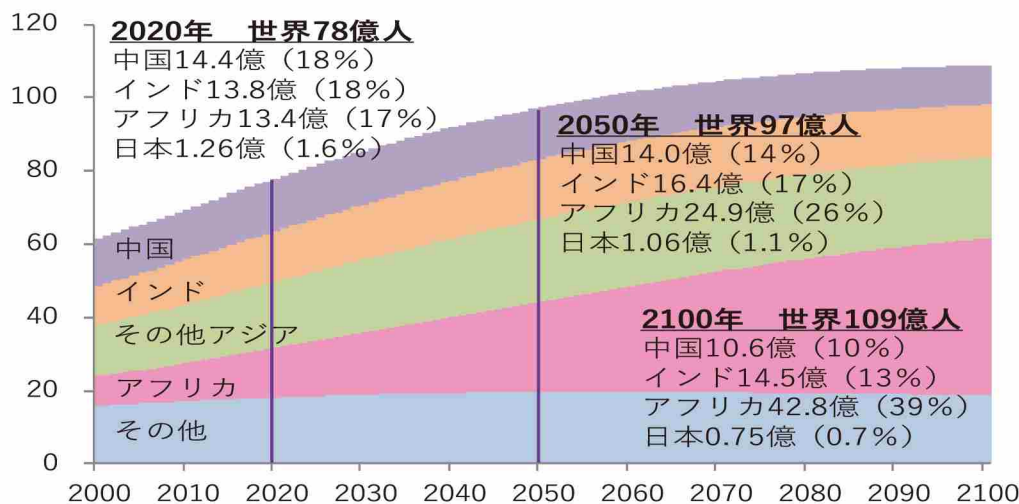
※2 AI:「Artificial Intelligence」の略で人工知能のこと。

※3 IoT:「Internet of Things」の略であらゆるモノがインターネットに繋がること。
【活用例: 家電製品の遠隔操作、自動運転など】

4 世界の成長と一体化

(1) 大きくなる世界

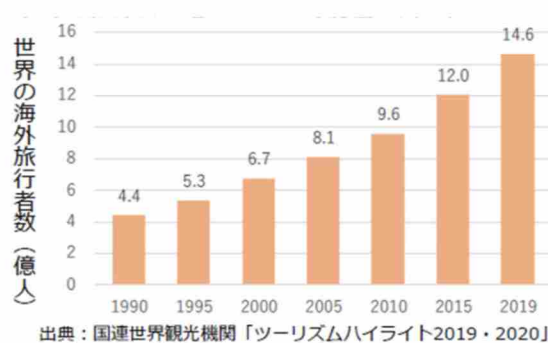
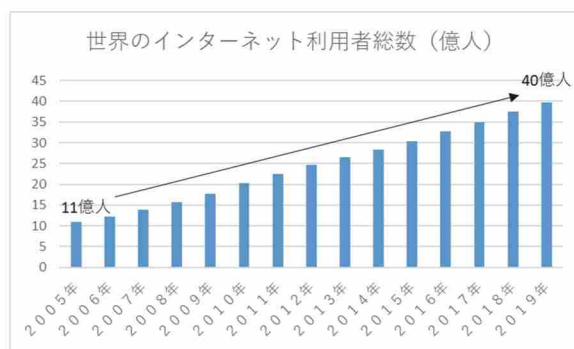
世界では、アジアやアフリカを中心に人口も経済もまだまだ成長が見込まれる国々があります。今後、活躍の場は世界中に広がり、ますます世界との結びつきを深めていくことが求められる時代となります。



(2) 一つになる世界

インターネットで世界が一つに結ばれ、情報の流通が勢いを増しています。近い将来、スマートフォン等により世界中の人々が結ばれる時代が到来します。

このような時代だからこそ、リアル（本物）を求めて人の移動がより一層活発になる可能性があります。



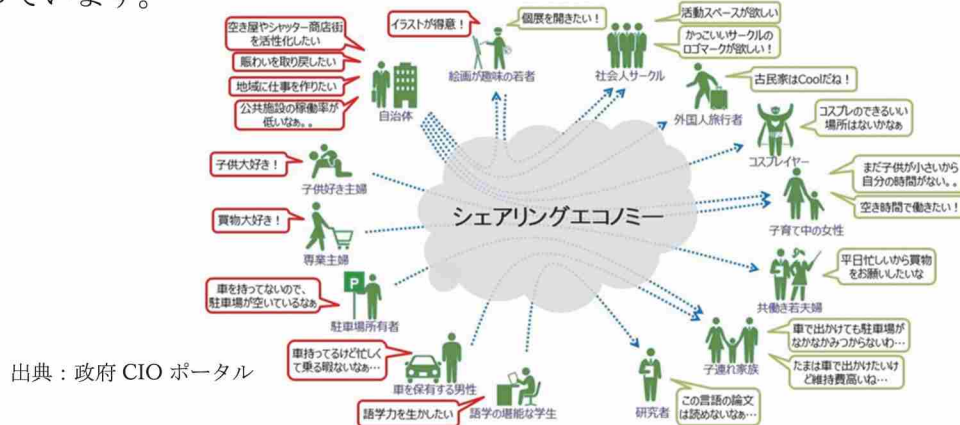
5 経済構造の変容

(1) デジタル化の進展

経済のデジタル化が進み、企業のビジネスモデルに大きな変化をもたらしています。ICTの発展によりあらゆる情報がデジタル化され、時間・場所・規模の制約を超えて様々な経済活動が可能となります。

(2) 新たな経済のかたち

資本主義による格差の拡大が顕在化する中で、社会への貢献を使命とする「公益資本主義」や、個人がインターネットを介して物や空間など様々なサービスを共有する「共有型経済（シェアリングエコノミー）」など新たな経済のかたちに向けた動きが広がっています。



6 価値観・行動の変化

(1) 価値観の多様性

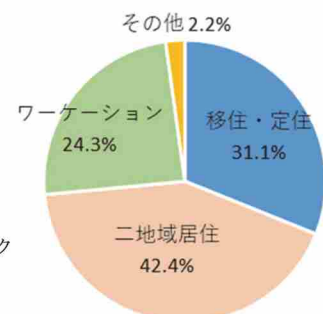
持続可能でよりよい世界をめざす目標である「SDGs」が世界の共通言語となったように、持続可能性の重視や多様性の尊重など新たな価値観やライフスタイルが広がりを見せています。

(2) 固定から流動へ

テレワークの浸透などにより、住む場所や働く場所の制約が消えつつあります。都市と地方を往来する二地域居住はコロナ禍によってさらに人気のスタイルとなって広がりを見せています。

また、一つの場所に住むという概念が崩れワーケーション^{※1}やノマドワーク^{※2}などの移動しながら働くスタイルも広がっています。

望む地方暮らしのスタイル



出典：「地方暮らしに関するアンケート」（株）トラストバンク
 （対象：地方暮らしに関心のある東京都内の20代以上の男女）

※1 ワーケーション：「ワーク」（労働）と「バケーション（休暇）」を組み合わせた造語。観光地やリゾート地で働きながら休暇を取る過ごし方のこと。

※2 ノマドワーク：ノートパソコンや携帯端末等を用いて、オフィス以外の場所で働くこと。

1 社会の現状と課題

(1) 人口減少・少子高齢化

淡路地域の人口は、1947年の22万7千人をピークに減少に転じ、2021年10月にはピーク時の半数近くまで減少しており、2050年には7万人まで減少すると推計されています。一方で、高齢者人口（65歳以上）が占める割合は増加し続け、2050年には人口の約半数（49.7%）になると推計されています。

淡路島の人口推移	
1947年 (226,890人)	※国勢調査
2021年 (125,852人)	※兵庫県推計人口(R3.12.1時点)
2050年 (70,016人)	※兵庫県将来推計人口

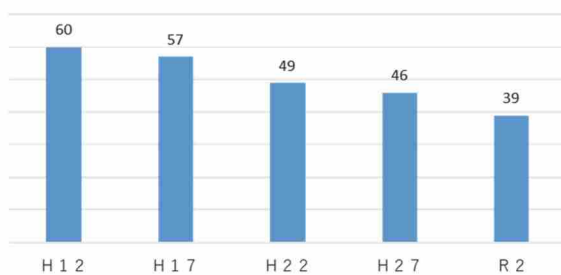
(2) 若者の流出と減少

淡路地域では、少子化に伴って学校の統廃合により学校数が減少し、学校行事や課外活動などの規模も縮小しています。

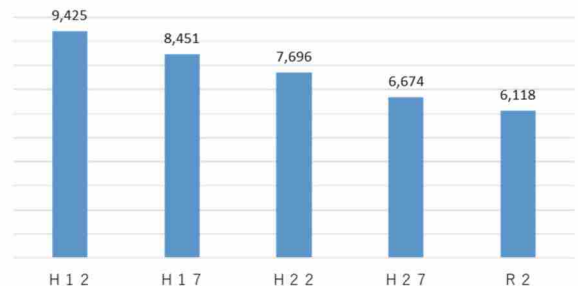
近年は、公立高校の学区拡大により、教育内容や部活動のニーズに応じた進学先の選択肢が広がったこともあり、島内の中学校卒業者のうち2割を超える生徒が島外の高校へ進学しています。

また、島内には、大学や専門学校などの高等教育の選択肢が限られており、高校卒業後に島外へ進学する若者も多く、卒業後も淡路島へ戻ってくる若者が少ないのが現状です。

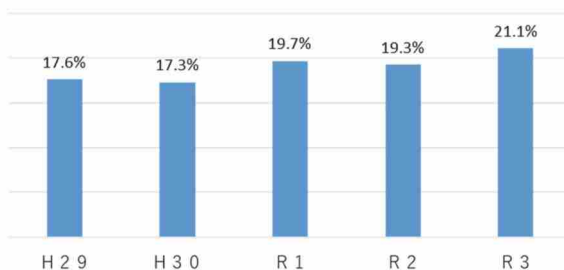
島内小学校数



小学校児童数(人)



中学卒業者の島外進学率の推移



(3) 空き家の増加

人口減少や核家族化を背景に空き家が増加しています。活用されずに放置されている空き家は、防災上、衛生上、景観上に悪影響を及ぼします。地域の交流拠点や移住促進等に有効活用する仕組みを構築する必要があります。

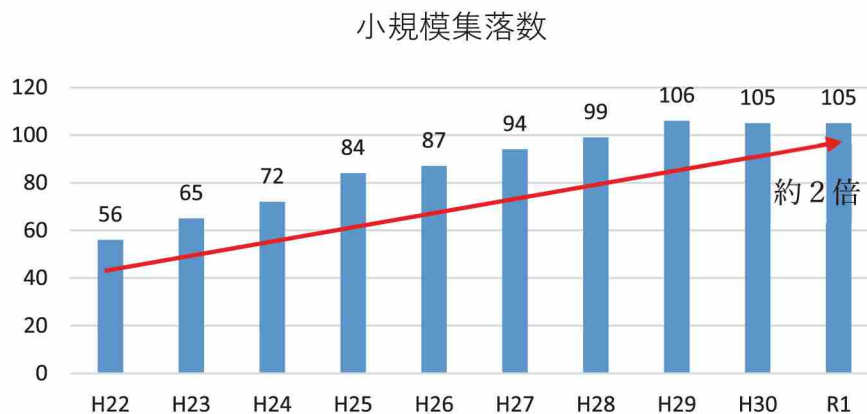


出典：総務省「住宅・土地統計調査」平成30年

(4) コミュニティの縮小

人口減少と高齢化によって地域活動の担い手が不足し、コミュニティが縮小しています。子ども会や町内会などの行事も出来なくなりつつあり、人のつながりが希薄になっています。

加えて、人口の流出も伴って、島内の小規模集落の数も増加し続けています。



※小規模集落：世帯数50戸以下かつ高齢化率（65歳以上比率）40%以上

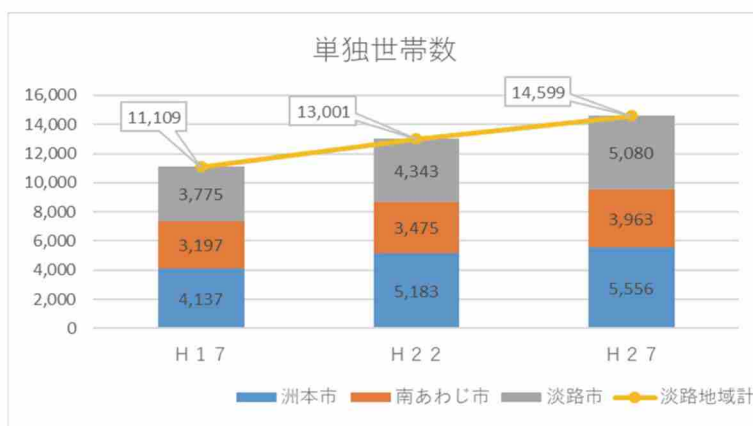
(5) 伝統芸能・文化の後継者不足

少子化や若者の島外流出によって、約500年の歴史を誇る淡路人形浄瑠璃をはじめとする伝統芸能や文化の後継者不足が課題となっています。また、地域の祭りや行事の規模が縮小するなど伝統文化の継承が難しくなっています。

(6) 孤立者の増加

人口減少に伴って地域や人とのつながりが希薄になったり、単独世帯が増加したりすることで、社会から孤立してしまう人が増加する恐れがあります。

また、社会のデジタル化の進展によって多くの人の暮らしが便利になる一方で、情報社会から取り残される人が増加する恐れもあります。



(7) 再生可能エネルギー発電設備の老朽化

今後、脱炭素社会に向けてさらに再生可能エネルギー発電設備が増加することが予想されます。30年後は様々な再生可能エネルギー発電設備が老朽化（耐用年数経過後）し、設備の更新・撤去が課題となっていることが想定されます。

(8) 淡路島の交通

ア 住民向け地域交通の充実

人口減少や高齢化による集落の点在化に加え、ラストワンマイル^{※1}の移動が大きな問題となってきており、路線バスやコミュニティバスなど従来型の公共交通だけでは対応が困難になっています。

今後は、従来の公共交通に加え、地域モビリティなど多様な交通形態を組み合わせることで、利用者ニーズにきめ細かく対応し、誰もが快適に移動できるまちをめざすことが重要です。



パーソナルモビリティ



超小型モビリティ



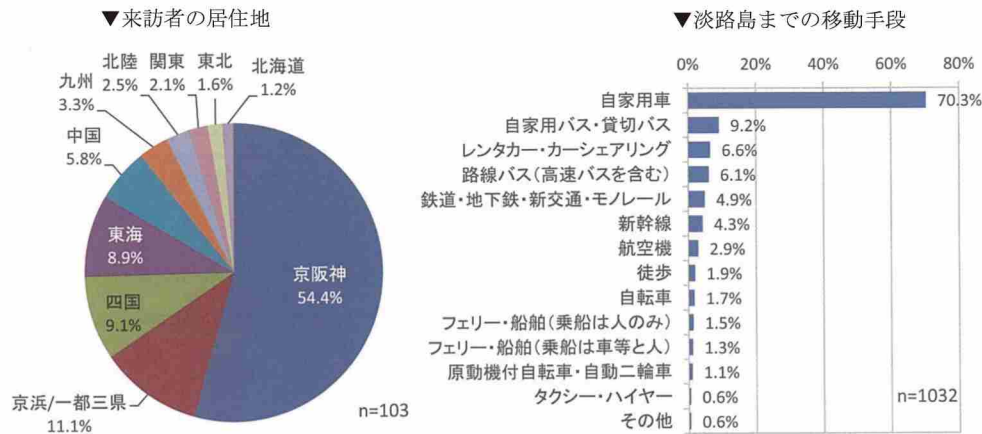
多目的モビリティ

※1 ラストワンマイル：最寄りの停留所などから最終的な目的地までの道のりのこと。

イ 観光客向けの移動手段の確保

淡路島の観光客は、日帰り客が増加する一方で、宿泊客はほぼ横這いで推移しており、関西圏などの近場から自家用車を利用しての来訪が大半を占めています。

今後、遠方からの観光客が公共交通を利用して島内の観光地を周遊できる公共交通網を構築する必要があります。



出典：国土交通省「高速バスの利用促進に向けた調査」(2016年度)

(9) 福祉の充実

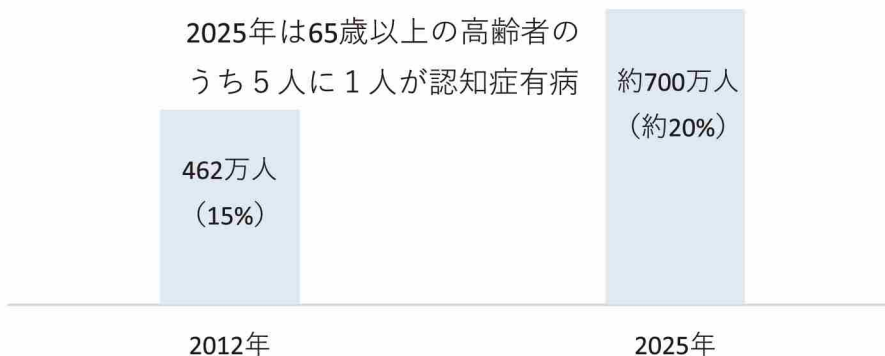
淡路島には元気な高齢者がたくさんいます。今後、医療技術の発達や更なる健康志向の高まりなどにより人生100年時代が到来し、元気な高齢者がますます増加することが予想される一方で、認知症リスクの増大や高齢者を支える側の人が不足するという課題も予想されます。

今後、ICTやロボットなどの先端技術も取り入れながら、誰もが最期まで生きがいを持って暮らせるように、活躍できる場の充実や地域で支え合う仕組みの構築などが必要となります。



移動介助アシスト

認知症高齢者（65歳以上）の将来推計



「日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究」(平成26年度厚生労働省科学研究費補助金特別研究事業九州大学 二宮教授)より作成

2 経済の現状と課題

(1) 地域産業

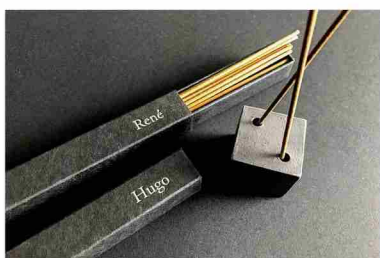
ア 地場産業

淡路島の地場産業には、生産高日本一を誇る線香や江戸時代から受け継がれてきた淡路瓦、淡路手延べ素麺などがあります。

人口減少や少子高齢化、生活の多様化などを背景に、地場産業を取り巻く環境は厳しさを増していますが、近年は新商品の開発や海外への販路開拓などの取組が展開されています。



スターバックス淡路S A店の壁材



新ブランド「Awaji Encens」



淡路島ぬーどる

イ 農畜水産業

私たちの生活を支えてきた農畜水産業は、人口減少と高齢化に伴って後継者・労働力不足が深刻さを増しています。加えて農業では、遊休・荒廃農地の増加、水産業においては漁獲量の減少や魚の小型化なども深刻となっています。

一方で、未利用農地を活用した多様な主体の農業参入への取組、農地や増殖場の整備による生産基盤強化など、産業の活性化に向けた取組が行われています。



出典：北淡路土地改良区HPより作成



出典：漁業センサス（2018年）

(2) 雇用・就労

淡路地域の有効求人倍率は、県内の他地域と比べて高い倍率で推移しています。業種別では、「医療・福祉」「飲食サービス・宿泊業」の2分野で全体の求人数の3割以上を占める状況となっています。働き方や暮らし方の変化、求職者のニーズに対応するため、就労機会や雇用形態の多様化が必要です。

有効求人倍率の推移

(令和3年9月現在)

区分	令和2年度	令和3年度					
	年平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月
淡路	1.55	1.47	1.55	1.69	1.78	1.77	1.70
全県	0.97	0.89	0.86	0.87	0.90	0.91	0.93

(3) 情報通信環境の高度化

社会のデジタル化が進む中で、望む誰もがITの利便性を享受でき、多様な働き方やライフスタイルの選択肢が広がるように情報通信環境の整備は不可欠です。

(4) エネルギーの有効活用

島内のメガソーラーの多くは、外部企業が地域外に送電するものであり、地域に還元される利益は大きくありません。豊富なエネルギー資源を有しながら、発電される再生可能エネルギーの地産地消が効率的に実現できていないことは、地域で自立した循環型社会の構築にとって大きな課題です。

3 環境の現状と課題

(1) 自然災害への対応

近年の想定を超えた異常気象や今後30年以内に高確率で発生すると予測されている南海トラフ地震や未知のウイルス感染症など、私たちの生活は様々な自然災害の危機と隣り合わせにあります。

ハード整備はもちろんのこと、災害発生時に地域や家族など小さな単位で危機に適應する力をつける必要があります。

1時間降水量80mm以上の年間発生回数（出典：気象庁）
 1976年～1985年（10年間）⇒平均14回/年
 2011年～2020年（10年間）⇒平均26回/年

南海トラフ地震の発生可能性の評価（国の地震調査研究推進本部の評価結果（令和2年1月）より）

地震区分 (次の地震規模)	地震発生確率			直近の 発生時期 a	次の地震までの 間隔*1 b	次の地震までの 残年数*2 c=b-a
	10年 以内	30年 以内	50年 以内			
南海トラフ M8～M9	30%程度	70～80% 程度	90%程度 もしくは それ以上	74.0年前	88.2年前	14.2年後

*1 時間予測モデルから推定された次の地震までの発生間隔

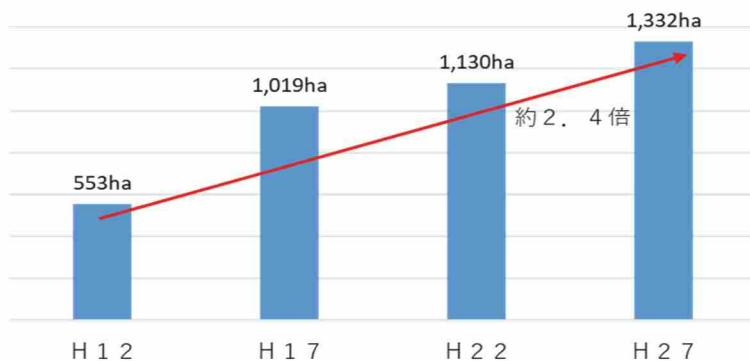
*2 地震調査研究推進本部が算定したa,bの年数を基に、本県で試算

(2) 山林、農地の荒廃

生活様式の変化や石炭・薪炭から石油・ガスへの燃料革命によって里山林が放置され、森林の荒廃が進んでいます。また、過疎・高齢化に伴う耕作放棄地の増加によって農地の荒廃も進んでいます。

淡路島の生物多様性を支える森林および農地生態系^{*1}の荒廃は、様々な生態系サービス^{*2}の劣化に繋がる懸念があります。

耕作放棄地面積の推移



出典：農林水産省「農林業センサス」

※1 農地生態系：農地およびその周辺の草地や陸水の環境と、そこに生息・生育する動植物等からなる生態系

※2 生態系サービス：様々な生物から人間が受ける利益、恩恵

(3) 放置竹林の増加

放置竹林の拡大により、保水能力・土砂崩壊防止機能の低下、生物多様性の低下、里山環境・景観の悪化、獣害被害の拡大など大きな問題となっています。

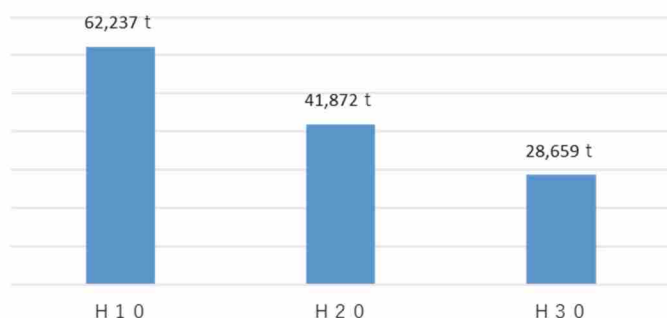
島内の竹林面積（出典：日本森林技術協会）

市名	竹林面積	県内順位	市面積に占める竹林面積割合	県内順位
洲本市	1,032.22ha	3位	5.65%	2位
南あわじ市	258.39ha	13位	1.13%	22位
淡路市	1,369.47ha	2位	7.42%	1位
淡路島全体	2,660.08ha		4.50%	

(4) 海の水質環境

排水処理技術の向上や下水道の普及等により陸からの栄養分が少なくなったことで、海の栄養分も減少し、その結果、海藻や魚が育ちにくく、漁獲量が減少しています。陸と海のバランスのとれた栄養循環など、豊かな海の再生に向けた取組が必要です。

瀬戸内海区における海面漁業漁獲量



出典：農林水産省「漁業生産額」

(5) 淡路島らしい景観や風景の喪失

周囲を海に囲まれていることから発生する漂着ゴミや、観光客の増加に伴う観光ゴミ、また、空き家や耕作放棄地の増加は淡路島らしい景観や風景を悪化させています。

淡路島の自然、文化、歴史的背景を踏まえたまちづくりや景観保全に取り組む必要があります。

瀬戸内海沿岸における海岸漂着物回収実績

沿岸	大阪湾沿岸	播磨沿岸	淡路沿岸	合計
平成26年度回収量(t)	303.3	66.5	365.4	735.2
平成27年度回収量(t)	266.9	63.2	218.1	548.2
平成28年度回収量(t)	88.2	37.9	116.6	242.7
平成29年度回収量(t)	67.3	94.6	253.3	415.2
平成30年度回収量(t)	113.9	247.3	374.6	735.8

(出典：兵庫県瀬戸内海沿岸海岸漂着物・漂流ごみ等対策推進地域計画)

(6) 社会インフラの維持管理

上水道や道路、橋梁などの社会インフラの多くは、高度経済成長期以降に建設されており、今後、大量の施設が築50年を迎えます。ICTなどの新技術の活用に加え、更なる選択と集中により、社会インフラの維持管理に取り組む必要があります。

2019年～2028年度に取り組む老朽化対策箇所

施設	箇所数
橋梁	27橋（新郡家橋等）
道路（舗装）	80km（洲本市等）
トンネル	1箇所（花立トンネル）
組立歩道	30m（淡路市）
道路附属物 （道路照明灯、道路標識、道路情報板）	33基（淡路市等）
道路法面施設	56箇所（南あわじ市等）
排水機場	12箇所（湊排水機場等）
水門・堰	14箇所（松島堰等）
樋門・陸閘	44箇所（長田川等）
矢板護岸	0.8km（入貫川等）
ダム施設	5箇所（大日ダム等）
防潮堤	6.3km（一宮海岸等）
砂防設備等 （砂防設備、地すべり防止施設、急傾斜地崩壊防止施設）	10箇所（中の子川第2堰堤等）
公園施設	2公園（淡路島公園等）

出典：兵庫県県土整備部「ひょうごインフラ・メンテナンス10箇年計画 箇所表（令和3年3月版）」

淡路島は、兵庫五国〈摂津（神戸・阪神）、但馬、淡路、播磨、丹波〉の中で唯一「島」という独自性を持っています。また、古くから文化、軍事、交通などにおいて重要な役割をはたし、政治の中心が江戸に移るまで、淡路島はその存在が国中から注目される島でした。実際に、古代日本の地図を広げてみると、淡路島の位置がちょうど国の中央にあることが一目瞭然です。

今日までの日本は、東京一極集中の時代が長らく続いていましたが、新型コロナウイルス感染症の広がりを契機に、働き方や生活様式が大きく変わり、地方分散の動きへと転換しようとしています。

今後、地方がより注目され、その役割は大きくなりつつあります。淡路島には、持続可能な地域社会のモデルとなるための魅力や可能性がたくさんあります。それらを最大限に活かし、その実現に向けて取り組む必要があります。

（1）立地と交通

現在の淡路島は、明石海峡大橋と大鳴門橋という2つの橋で本州、四国と結ばれ、洲本から四国（徳島）へは約40分、神戸までは約60分という恵まれた立地環境にあります。

歴史を見ると、古代から播磨、讃岐、和泉、摂津、阿波へ海を共有して生活していたことや、穏やかな海に囲まれていることから海上交通を基盤とした遠距離交流の中継拠点であったと考えられています。そのため、水稻耕作や青銅文化などの弥生文化が北九州からいち早く淡路島に伝わりました。

淡路島が発展するためには古くから栄えた海上交通の重要性を見直すことも必要なのではないでしょうか。

また、近い将来、技術革新の進歩により空飛ぶ技術が発達し、ドローンや空飛ぶ車が実用化され、空中を自由に移動できる時代が訪れているかもしれません。

そうなれば、立地環境に恵まれた淡路島が、陸・海・空のあらゆる空間を活用した交通のメインストリートに位置する時が来ることでしょう。



(2) 歴史と伝統文化

淡路島は、『古事記』や『日本書紀』において、日本で最初に生まれた“はじまりの島”とされ、他の地域には決して見いだせない歴史を持っており、その歴史ストーリーは日本遺産にも認定されています。

また、約500年の歴史を持ち、国指定の重要無形民俗文化財である「淡路人形浄瑠璃」や浄瑠璃くずしから始まった「だんじり唄」、年中を通して島のどこかで行われている「祭り」など、歴史に彩られた文化は、地域とそこに暮らす人々の誇りです。地域の豊かさは、歴史と文化の遺産の上に築き上げられることによって、より一層の深みと彩りが増します。

このような歴史ある伝統文化を守り、新たなかたちや価値観を創出しながら次の世代へと継承していくことで、これから先も淡路島に住む人や訪れる人の心に豊かさをもたらし、地域が活性化していくことでしょう。



(3) 自然の恵み

淡路島は、どこにいても周囲を見渡せば山・川・海を見ることができます。万葉集や百人一首などの和歌集にも、淡路島の海や景観など自然を詠った和歌が数多くあることから、昔から人々を魅了してきたことがうかがえます。

また、温暖な気候と豊かな自然があふれる淡路島は、四季折々の花々に彩られ、多種多様な動植物の生息地にもなっています。中には、県下で淡路島だけに生息しているものも数多くあります。

さらに、近年では、その豊かな自然環境が織りなす美しい景観や美味しい食などをテーマとした観光地化が進み、島外から多くの観光客が訪れています。

食や自然などの観光資源にさらに磨きをかけ、都会では味わうことのできない魅力を創出することで、世界中から選ばれる「観光の島」として発展することでしょう。



(4) 食とエネルギー

淡路島は古来、“山の幸、海の幸、野の幸”に恵まれ、天皇や朝廷に豊かな食材を貢進する「御食国」と呼ばれていました。

水に関しても、とても良質な水があり、仁徳天皇の時代には、毎朝夕に天皇家まで届けていたといわれています。

こうした食の豊かさは、現代に至るまでずっと継承されています。温暖な気候に恵まれ、三毛作など農業技術も大変優れており、淡路島の食料自給率[※]はカロリーベースで110%、生産額ベースでは389%を誇っています。(※平成24年度実績)

玉ねぎ、レタス、淡路ビーフはもとより、近年は、「淡路島3年とらふぐ」、「淡路島サクラマス」、「淡路島なるとオレンジ」、「淡路島えびす鯛」など、新たな淡路ブランドを生み出しながら、昔と変わることなく人々に豊かな食を提供し続けています。

また、温暖な気候と豊かな生物多様性に恵まれている淡路島は、様々な自然エネルギーを生み出す可能性を持っています。

今、世界中でエネルギー枯渇や温暖化が危惧される中で、カーボンニュートラルをめざす動きが加速しています。

この“はじまりの島”である淡路島が、食もエネルギーも自給自足する“環境未来島”として、他に先駆けて全国のモデル地域となる可能性を持っています。

(5) 人柄

淡路島は温厚で優しい気性の人が多く、人と人とのつながりが濃密な地域です。ご近所付き合いが盛んで、野菜や魚をもらったり、余り物をあげたりと「おすそわけの文化」が根強く残っています。

また、淡路弁を使って誰とでも気さくに会話をするのも淡路島の人の特徴で、「淡路島には敬語がない」と言われるくらいです。良い意味で、人と人が親密な関係を築いているということでもあります。

方言は、その土地の歴史やそこに暮らす人々の喜びや悲しみなどが詰まったふるさとの文化遺産であり、大切にしなければなりません。淡路弁の中には、きつと感じる表現もありますが、一方で便利な表現や親しみやすい表現もあります。方言は、淡路島を訪れる人や移住者との距離を縮めるコミュニケーションツールとしても活用ができるでしょう。




 基本
理念

人と自然の“環”が広がる淡路島 ～「はじまりの島」から はじめらんか～

淡路島は、「国生みの島」「御食国^{みけつくに}」と呼ばれてきた歴史的ストーリーや、都市近郊の「島」という立地特性など、多くの資源・魅力に恵まれています。

淡路島の人々の暮らしとそれを支えてきた自然には、切っても切れない強いつながりがあります。これまでの淡路地域ビジョンで掲げてきた“環境立島”の理念を継承し、人と自然の良質な関係が環となって広がり、誰もが安心して暮らし続けられる環境豊かな島をめざします。

また、昔から交通の要衝である淡路島は、多くの人が行き交い新しいことが「はじまる」島でした。日本の「はじまりの島」から新たな取組や挑戦が生まれ、未来に向かって発展し続ける島をめざします。



 目標

- 目標 1) 持続可能な暮らしと環境の島
- 目標 2) 食とエネルギーを生み出す島
- 目標 3) 危機や災害から生き残る島
- 目標 4) 観光客や移住者と共に発展する島
- 目標 5) 全ての人が誇りを持って生きる島

淡路島の豊かな自然環境、美しい景観、豊富な食、農漁業など産業の営みの豊かさ、伝統文化、さらには人と人との濃密なつながりなど、淡路島の個性豊かな資源を守り・育み・強みを活かした島づくりをめざして5つの目標を掲げます。

持続可能な暮らしと環境の島

環境への配慮と次世代の技術を適正に活用し、快適さと環境が両立した、便利で暮らしやすい島づくりをめざします。

そして、人口が減少する中であっても、人々のつながりが希薄にならず、地域が活力にあふれ、持続可能な暮らしを実現します。

地域の将来像

(環境)

●自然環境への配慮と、地域資源を活用した脱炭素社会が実現しています。再生可能エネルギーの普及に加えて水素の活用も広がり、世界を牽引する環境未来島として持続可能な地域社会が実現しています。

(交通)

●自動運転技術の普及や、島という立地を活かして陸・海・空のあらゆる空間において多様なモビリティ（移動手段）が活用されています。誰もが移動に困ることのない、便利な田舎暮らしが実現しています。

(雇用・経済)

●情報インフラが整備され、多くの企業が多様な働き方を求めて拠点を淡路島に移し、島内の経済に活力が生まれています。地域産業の活性化と安定した雇用環境により、多くの若者が淡路島で働き、地域内で経済が循環しています。

(働き方)

●都市近郊の立地と自然豊かな環境を活かして、ワーケーションやリモートワークの適地として選ばれています。働いてよし・住んでよし・遊んでよしの「職・住・遊」をまるごと楽しむ働き方が実現しています。

(文化継承)

●伝統文化や祭りなどが日々の暮らしの中で様々な付加価値を加えながら脈々と受け継がれています。文化の継承によって、地域と人々がつながりを持ち続け、その地域に住み続けたいと思える人が増えています。

取組の指針

- 自然を大切にしながら、二酸化炭素排出量の少ない暮らしや、低炭素社会の実現に向けた取組を実践しよう。
- 自転車道などの交通網を整備するとともに、シェアサービスや様々な移動手段を積極的に活用しよう。
- 情報インフラの整備や淡路島の魅力発信など、企業にとっても魅力ある環境をつくろう。
- 地域産業の魅力発信と国内外との連携により、地域産業の可能性を広げ、島内の雇用を創出しよう。
- テレワークや副業、趣味と仕事の両立など、自由度の高い働き方を実践しよう。
- 幼い頃から伝統文化に触れる機会をつくり、伝統文化の良さを語り継ごう。

「御食国・淡路島」の人々を支えてきた農畜水産業の持続的な発展と、温暖な気候や周囲を海に囲まれた立地環境などを活かした再生可能エネルギーの創出により、食とエネルギーが持続的に循環する島をめざします。

地域の将来像

(農畜産業)

●農業を専門とする人たちに加え、「援農」や「半農半X」^{※1}、「雇用就農」など多様な就農形態により農業に関わる人が増加し、地域の農業が支えられて発展しています。島の農産物は淡路ブランドとして付加価値を生み出し国内外に流通しています。

(水産業)

●豊かで美しい海が再生し、漁場環境の整備、養殖技術や栽培技術の向上などにより淡路島のおいしい魚が安定して国内外に流通しています。

(スマート化)

●ICT・ロボット技術等を活用した1次産業のスマート化が進み、生産性や収益性の向上、新たな担い手の確保、さらには技術が継承され、淡路島の農畜水産業が発展しています。ドローンなどを活用した輸送技術が確立し、淡路島の新鮮な食材が各地に届けられています。

(エネルギー)

●地域や家庭において、自然や景観に配慮した再生可能エネルギーの創出が進み、誰もが「エネルギーの生産者」となっています。エネルギー自給率は100%を超え、島内で再生可能エネルギーが循環しています。

(地産地消)

●地元食材の地産地消によって、人々の健康と淡路島の食文化が支えられています。また、地産地消は、生産者と消費者の信頼関係を築くとともに、食料や資源を大切にする心が育まれています。

取組の指針

- 多様な人材が意欲的に農畜水産業にチャレンジでき、職業として選択できる環境や機会をつくろう。
- 森・里・川・海の連携した環境保全に取り組もう。
- 1次産業のスマート化に取り組もう。
- 地域や家庭で再生可能エネルギーの創出と利用拡大に取り組もう。
- 食品ロスの削減に取り組もう。
- 地元食材の販路拡大や開拓など、生産者と消費者がつながる機会をつくろう。

※1 半農半X：農業と自分のやりたいこと(=X)を両立させる生き方。

これまでの災害の経験や教訓を活かして災害に強いまちをつくり、災害に対する個々の備え【自助】、人々と地域の絆【共助】、住民ニーズに合った公的支援【公助】の連携によって、災害に適應できる島を実現します。

地域の将来像

(防災インフラ)

●災害に強い交通ネットワークの整備、ため池の整備、治水・治山事業など、災害に強いまちづくりが推進され、誰もが安心して暮らしています。

(地域防災力)

●過去の経験を活かした防災教育などが浸透し、自分たち（地域）で何とかしようという防災意識が高まっています。隣保の絆やコミュニティの共助によって助け合う防災ネットワークの構築や、公共施設などを活用した情報発信環境も充実し、地域単位で危機の発生に備えられています。

(デジタル化)

●AIやロボットなど、ICTを活用した防災・減災対策が浸透しています。災害情報の発信や高齢者の避難行動支援など、デジタルを活用した高度な防災環境が整っています。

(自然を活かした防災・減災)

●豊かに再生された森・里・川・海の自然環境が防災・減災に活かされています。グリーンインフラ^{*1}の活用や流域治水^{*2}が推進されるなど、自然と共生するまちづくりが形成されています。

(復興力)

●災害時でも、食とエネルギーの自給自足、日本一の数を誇るため池の多面的機能などの活用によって、島が孤立することのない環境が整っています。また、災害が発生した後も、社会インフラの強靱化や安定した維持管理により、いち早く復興できる力が備わっています。

取組の指針

- 安全・安心で災害に強い社会基盤整備を進めよう。
- 地域内のイベントへの積極的な参加や、近所づきあいを深めるなど、コミュニティづくりに取り組もう。
- リスクや情報の見える化など、わかりやすい防災情報の発信に取り組もう。
- 地域で楽しく学べる防災教育や防災イベントなどを開催し、積極的に参加しよう。
- 災害情報や避難情報サービスを充実させ、活用しよう。
- 森・里・川・海の自然環境を守る取組を実施しよう。
- 行政も市民も一体となって防災減災に取り組もう。

※1 グリーンインフラ：自然環境が有する機能を社会における課題解決に活用しようとする考え方。

※2 流域治水：流域に関わるあらゆる関係者（国、県、市町村、企業、住民）が協働し、流域全体で水害を軽減させる治水対策

地域独自の資源を最大限に活用した観光業の発展と、移住しやすい環境や何事にもチャレンジできる環境づくりをめざします。地域住民・観光客・移住者が多様な形でつながりを持ちながら発展する島を実現します。

地域の将来像

(観光)

●豊かな自然や淡路島らしい景観、四季折々に楽しめる美味しい食など、地域資源を活かした観光が展開されています。自然とリゾートが融合した観光地として国内外から多くの来島者が訪れ、サイクルツーリズムやガストロノミーツーリズム^{※1}など、景観や食を楽しみながらの滞在型観光が広がっています。

(観光交通)

●海上交通の発展や2次交通の充実、自転車専用道路などの交通網が整備されています。様々な交通手段がシームレスにつながり、島内の観光地を自由に周遊できる環境が整っています。

(交流)

●「国生み神話」^{みけつくに}、「御食国」などの歴史的ストーリーや淡路人形浄瑠璃、だんじり唄などの伝統芸能が人々の交流のコンテンツとして人気を集めています。島の歴史や伝統芸能を通じて国内外の人々の交流が深まっています。

(移住環境)

●島暮らしや起業など、やりたいことにチャレンジできる環境や支援できる環境が整っています。働き方や暮らし方に多様な可能性が広がる地域になっています。

(移住促進)

●移住や地域活動、観光の交流拠点が地域の中に根付いて、オンラインやSNSを通じた交流の場も広がっています。移住者が増え、地域に溶け込んで地元住民と共に島の暮らしを楽しんでいます。

取組の指針

- 様々な産業と観光を結びつけることにより互いの価値を高め、淡路島の観光を盛り上げよう。
- 自動車に頼らずに島内を移動できる環境づくりに取り組もう。
- デジタル技術を活用しながら、歴史や伝統文化に新しい形を創造しよう。
- 企業とのマッチング制度や自立支援のための制度など、移住しやすい環境をつくらう。
- 空き家や空き地を有効に活用しよう。
- SNSやデジタル技術を活用して、島暮らしの魅力を発信しよう。

※1 ガストロノミーツーリズム：地域に根ざした食、その背景にある地域の自然や歴史等の魅力に触ることそのものを目的とした旅行

全ての人に役割や居場所があり、誰もが住み慣れた地域で最期まで安心して暮らせる島をめざします。個人の価値観が尊重され、年齢、性別、障害の有無、国籍などに関わりなく活躍する場が広がり、自分自身の生き方や地域に誇りを持って生きることができる島を実現します。

地域の将来像

(健康)

●健康志向の高まりと医療技術の発展等によって「人生 100 年時代」が到来しています。第二、第三のライフステージの活躍の場が広がり、生涯現役で活躍する高齢者が増加しています。

(福祉)

●障がい者や認知症高齢者、社会への適応が難しい人など、社会的弱者が理解され、地域の人々が共に支え合う関係が大切にされています。公的なセーフティネット^{※1}も整備され、誰もが住み慣れた地域で最期まで安心して暮らせる地域社会が実現しています。

(子育て)

●家庭や地域、関係機関が一体となって子どもの成長を支えています。淡路地域の濃密な人のつながりによる助け合いや見守りネットワークによって、安心して子育てができる地域になっています。

(教育)

●バーチャルとリアルを活用した、一人ひとりの個性を伸ばす教育が行われています。オンラインで国内外の人と交流を深めることによって、多様な価値観や地域への愛着と誇りを持った子どもが育っています。また、資源を活かした環境教育や体験活動など、淡路島全体をフィールドにした学びの場が広がり、心豊かな子どもが育っています。

(地域コミュニティ)

●地域の人々が家族的なつながりを持った“古き良き時代のコミュニティ”が復活しています。ご近所付き合いが活発になり、地域の人々が助け合えるやさしい地域社会が構築されています。

取組の指針

- 高齢者の経験やスキルを大切にし、活かせる場をつくろう。
- 社会的弱者を地域で支える仕組みを構築しよう。
- 地域で子どもを見守るネットワークの構築や見守り活動を広げよう。
- VR（仮想現実）を活用した職業体験など、若者の選択肢が広がる機会をつくろう。
- 資源を活かした体験教育やふるさと学習に取り組もう。
- リカレント教育^{※2}や学校教育以外の学びの場など、多様な学びの場をつくろう。
- 地域内での声かけやイベント参加など、地域のコミュニティづくりに取り組もう。

※1 セーフティネット：病気やけが、万が一のことがあっても安全安心に社会生活を送るための救済策

※2 リカレント教育：社会人になってからも必要な知識やスキルを身につけるために学びを繰り返すこと

1 役割

ビジョンを実現するためには、個人・団体・企業・行政それぞれが役割を持ちながら、参画と協働により一体となって地域づくりに取り組むことが重要です。

【住民・地域の役割】

- 住民自らが地域づくりの担い手として、ビジョンの実現に向けた取組みの推進
- 淡路島をより良い地域にし、次世代へつないでいくために、日頃から身近な取組を実践

〈私たちにできること〉

- 地域行事や祭りなどに積極的に参加する
- 伝統芸能や淡路の歴史を学ぶ、伝える
- 自然や地域資源を大切にする
- ゴミを出さない生活をする
- 森、里、川、海 of 自然環境の価値をよく知り、価値を損なわない使い方をする
- エネルギーの消費を抑え、自然の豊かさが持続する暮らしを心がける
- 節水、節電を心がける
- 趣味を楽しむ
- 暮らしに自然エネルギーを取り入れる
- 地産地消を心がける
- 近所の人との関わりを持つ
- 家具の転倒防止や防災グッズを備える
- まちの清掃・防災活動に参加する
- 移住者と地域とのつなぎ役になる
- いじめや差別をしない、させない
- 困っている人を見かけたら助ける
- 他者を尊重する
- 世代を超えて集える場づくり
- 多世代間の交流を積極的に行う
- 地域で子どもや高齢者の見守りをする
- 地元商店を活用する
- 地域の中で高齢者を支える人材を育てる
- 学校行事へ積極的に参加する
- 栄養バランスを考えた健康的な食事をする
- 徒歩や自転車での移動を心がける
- 自然の中で遊ぶ
- SNSで地域の魅力を発信する

【地域団体・企業の役割】

- 専門知識やノウハウを活用し、様々な住民を巻き込んだ活動の展開
- 住民同士をつなぐネットワークを構築し、自治組織の支援や住民主体となる活動をコーディネート
- 行政の政策づくりに積極的に参画し、協働によるまちづくりを推進
- 企業の持つ特色やノウハウを活かした地域づくりへの貢献
- 地域づくりに参加しやすい社内環境の整備

【行政の役割】

- 道路や河川の整備など社会基盤の整備
- 地域を担う人材の育成
- 市民活動の支援、情報の提供、住民の行政への参加機会の提供など、住民主導の地域づくりのサポート役としての支援
- 多様な住民ニーズに対応した行政サービスの提供

2 ビジョン推進の仕組み

ビジョンは作って終わりではなく、成長し続けるビジョンをめざします。そのため、ビジョンの実現に向けて具体的な行動につながるよう以下のような仕組みをつくり、状況に応じて見直しも柔軟に行っていきます。

(1) 実行プログラムの策定

県民局において、ビジョンの実現に向けた行政計画を策定し、各行政分野においてビジョンの実現に向けた様々な施策に取り組んでいきます。

(2) 地域プロジェクトの推進

住民・団体・企業等をつなぎ、地域ビジョンの実現に向けたプロジェクトを企画する場を設けます。

各主体をつなぐプロジェクトや行政と連携したプロジェクトなど、淡路地域ならではのユニークなプロジェクトを推進します。

(3) 対話と学びの場づくり

ビジョン策定後も地域の将来を考え続けていくことが大切です。学校や小さな地域単位など、多くの住民が地域の将来を語り合い、学び合う場づくりを進めます。

また、多様な媒体を用いてビジョンの実現に向けた取組の情報をわかりやすい形で発信します。

(4) 推進状況の見える化

ビジョンの推進状況を毎年度点検評価し、その結果を公表するとともに、社会情勢の変化など、状況に応じたビジョンや実行プログラムの見直しに柔軟に対応します。